

琉球大学学術リポジトリ

沖縄と韓国の交流史： 韓国語の背景を踏まえた通訳案内士育成に向けて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2016-02-17 キーワード (Ja): 韓国人観光客, 通訳案内士, 韓国人の足跡, 交流史, Koreans' footsteps キーワード (En): Korean tourists, Okinawa designated local guide, History of relations 作成者: 長嶺, 聖子, Nagamine, Seiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008214

沖縄と韓国の交流史

—韓国語の背景を踏まえた通訳案内士育成に向けて—

History of Relations between Okinawa and Korea: Enhancing the Training of Okinawa Designated Local Guides Based on Korean Language Background

長嶺 聖子*

Seiko NAGAMINE

Recently an increasing number of Koreans has visited Okinawa as tourists. But tourist guides here are not well aware of a long and close interchange between Korea and Okinawa or the Ryukyuan Kingdom. Obviously full knowledge will help both parties to make their business more meaningful, attractive, and profitable. Documents show that both the Koryeo and Yi Dynasties had over 200 contacts with the Ryukyuan Kingdom in the 14th and 15th centuries alone. The Kingdom honored Koreans in an inscription of a noted temple bell cast in 1458. About a decade later, Korean presented Buddhist scriptures in return for rarity gifts from the Kingdom. Subsequently the relationship between the two countries waned due to political turmoil on both sides. In 1616, three Korean potters were brought to Okinawa in the aftermath of the Japanese-Korean wars triggered by Hideyoshi Toyotomi. They made a great contribution to Ryukyuan pottery. During WW II, many Koreans got killed in Okinawa. In 1975, the Korean Memorial Monument was dedicated for over 10,000 such souls. The writer strongly hopes that both the tourists from Korea and the Okinawan people know these invaluable facts of historical interchange to use for their good relationships in future.

Key words

韓国人観光客、通訳案内士、韓国人の足跡、交流史

Korean tourists, Okinawa designated local guide, Koreans' footsteps, History of relations

1. はじめに

昨今、沖縄を訪れる韓国人観光客の伸び率は、他の外国人観光客の伸び率と比較して、最も高い（沖縄県入域観光客統計、2014）。しかし、このように増えつつある韓国からの観光客に対し、受け入れ先の沖縄県の韓国語通訳案内士の数は非常に少ないのが現状である。その対策として、沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課を中心に、2011年度から「沖縄県特例通訳案内士育成等事業計画」の案が検討され、2012年の7月に初めての検討委員会（筆者も委員の一人）が開催され、数回の検討委員会を経て、2013年度より、英語、中国語、韓国語の人材育成の研修事業がスタートした。観光地を説明する研修は、共通する内容をそれぞれの言語に翻訳されたテキストを用いて講義が行われている。つまり、外国人観光客は、英語圏であれ、アジア圏であれ、同一の内容によって沖縄が説明されることになる。

沖縄県内の大学で韓国語を教えている筆者が韓国語を教える際に最も心がけていることは、言語の背景にある文化や歴史のことも学生たちに知ってもらい、言語とその社会制度への理解を深めてもらうことである。つまり、日本本土と異なる歴史や文化を持っている沖縄県のことをより正確に伝えるためには、歴史と共に刻まれてきた両地域の交流史の足跡について、知ってもらうことは非常に重要である。

*琉球大学非常勤講師

本稿の目的は、沖縄の観光地を中心に、沖縄に残された韓国人の足跡をたどり、琉球王朝と当時の朝鮮半島との交流史を紹介し、歴史的に所縁のある場所に関して、積極的に情報を提供し、沖縄県民と沖縄を訪れる韓国人観光客が相互に親しみを感じ、将来の友好的な交流に発展する一助とすることである。

2. 時系列でたどる沖縄における韓国人の足跡

2.1. 浦添市ようどれと首里城で発見された高麗の瓦

浦添市のようどれは、浦添城跡の北側中腹に位置し、英祖王（在位 1260 年～1299 年）によって 1273 年に自然洞窟を掘削して整備され、現在は英祖王と尚寧王（在位 1589～1620）の陵墓となっている。英祖王は、90 年間続いた英祖王統の初代の王で、浦添城を築城したという。その浦添城跡から高麗の瓦が多く発掘され、特に英祖王の墓室内の屋根瓦にも使われていたようだ。瓦には、「癸酉年高麗匠人瓦匠造」の文字が鮮明に刻まれており、また、同様の瓦が首里城内でも発掘された。1997 年に浦添市教育委員会が実施した浦添城跡内の浦添ようどれ発掘調査では、高麗糸瓦の窯らしきものも発掘されたという。つまり、英祖王在位中の 1273 年に高麗の瓦が取り入れられたとなると、1429 年に琉球王国が誕生する約 150 年も前に、当時の中山は高麗王朝（912 年～1392 年）との交流があったということになる。

高麗史によれば、高麗王朝と沖縄の公式の交流は、1389 年に中山王の察度（在位 1350 年～1395 年）により使者が派遣され、沖縄の沿岸で遭難した高麗人の帰還や南方の珍奇な品が献上されたのが始まりだと伝わっている。中山の察度王は、英祖王を初代王とした英祖王統（5 代目で終わる）の次の王統で、2 代目の武寧王（在位 1396 年～1405 年）で終わった。高麗王朝は、1392 年に幕を下ろし、朝鮮王朝（1392 年～1910 年）が始まったので、有史に残っている高麗王朝と中山との交流は、高麗王朝の最後の王である第 34 代目の恭讓王（在位 1389 年～1392 年）を最後に終わったことになる。

しかし、浦添城跡や浦添ようどれの英祖王の墓室屋根瓦で多くの高麗瓦が発見されているので、実際、高麗王朝と沖縄は歴史書に記されている 1389 年以前から交流があったと思われる。使用されていた高麗の瓦に刻まれている「癸酉年高麗匠人瓦匠造」の癸酉年は、何年のことであったかが一つの手掛となる。13 世紀と 14 世紀の癸酉年は、1213 年、1273 年、1333 年、1393 年に当たるので、英祖王の在位時（1260 年～1299 年）を考慮すれば、1273 年が最も近いと言える。勿論、英祖王統の前に存在した舜天王統を考えれば、1213 年は、舜天王（在位 1187 年～1237 年）の在位になる年にも当たるが、その勢力は海外国と交流を行うほどのものではなかったと思われる。従って、「癸酉年高麗匠人瓦匠造」の癸酉年は 1273 年が最も有力と言える。

高麗史に、中山の察度王在位時の公式な交流が高麗王朝末期の 1389 年と記されているが、もし、1273 年にも交流があったとするならば、1389 年から遡ったおよそ 116 年も前の交流について何の記録もないということは、正式な交流ではなかった可能性が高い。13 世紀の高麗の情勢は、1231 年から 1273 年にわたり、モンゴル帝国（元）の侵攻を繰り返し受け、高麗王朝は衰退に向っていた。当時、三別抄（サムビョルチョ）という高麗の国内反乱鎮王のための武装組織があったが、モンゴルの圧力を背景に変わりゆく高麗中央勢力に強く抵抗した。結局、三別抄は、韓半島の西南部にある珍島（チンド）に移り、珍島の北部にある龍蔵山城（ヨンジャンサンソン）を拠点に戦ったが、力尽きて済州島まで追われることになる。1273 年に三別抄軍は全滅したと言われていて、歴史上では「三別抄の乱」という。つまり、この時期の高麗王朝は、ほぼモンゴルの支配下にあり、外国と公式な交流を行うのは無理だったと思われる。

三別抄（サムビョルチョ）軍は、本当に一人残らず全滅したのかどうか後世に話題となったが、その謎に新たな想像を膨らませたのが三別抄が拠点としていた珍島の龍蔵山城で発見された瓦（スマクセ瓦）

と沖縄の浦添ようどれや首里城で見つかった瓦がほぼ同じだったということだった。特に、瓦に刻まれている「癸酉年高麗匠人瓦匠造」という文字は、鏡を通すと、はっきり分かる形で明確に識別できるもので、さらに、瓦に刻まれている「癸酉年」が1273年のことであれば、三別抄（サムビョルチョ）軍が済州島まで追われ全滅したという1273年の年と一致することになる。

2.2. 万国津梁の鐘の銘文

1429年、沖縄南部の佐敷出身である尚巴志が当時の三山（南山、中山、北山）を統一し、琉球王国が誕生した。尚巴志は、沖縄南部の佐敷の按司であった父の尚思紹を第一尚氏王統の最初の王とし、浦添城と共に中山王の居城であった首里城を整備し琉球王朝の王宮とした。韓半島との交流は、1389年高麗王朝との公式交流後、その高麗が1392年に滅亡し、「朝鮮」という李王朝に変わった後も続いていたことは、『李王朝実録』にも記録が残されている。特に、韓半島からの漂流民の帰還による交流が多かったようだ。

琉球王朝の第一尚氏王統は、64年間に7代まで続いた。尚巴志の5男で、第一尚氏6代目に当たる尚泰久王（在位1454年～1460年）は、当時の権力闘争で焼失した首里城を再建し、1458年には万国津梁の鐘を鑄造させ、その鐘を首里城正殿前に吊るした。その万国津梁の鐘の銘文は、琉球王国が周辺の国々と友好的に交流し、海洋国として大交易を展開し、世界の架け橋であることを知らせる内容である。

（原文の訳）

琉球国は南海の勝地にして
三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車となし
日域を以て唇齒となす
此の二者の中間に在りて湧出する所の蓬莱島なり
舟楫を以て万国の津梁となし
異産至宝は十方刹に充滿せり

この銘文において最も興味深いところは、近隣国との関係を述べている順序に関する記述である。琉球王国は、中国（明）と冊封関係にあったので、最も緊密な関係であったはずだが、その中国との関係を述べる前に、「三韓の秀を鍾め」という韓半島との関係を一番に挙げたのは、大きな意味があったに違いない。ここでいう「秀」というのは、もしかすると、現代風のノウハウやスキルのことかも知れない。つまり、凡鐘の鑄造機術の導入などの可能性である。また、15世紀の韓半島は、李王朝時代の中でも比較的に政治が安定していた時期であった。

琉球王朝の第一尚氏王統の中でも、2代目の尚巴志（在位1422年～1439年）から7代目の尚徳王（在位1461年～1469年）までの48年間を李王朝と重ねてみると、第4代目の世宗（在位1418年～1450年）から第8代目の睿宗（在位1468年～1469年）に相当する。第4代目の世宗は、1443年に韓国の文字「ハングル」を完成させ、1446年に民に頒布した国王である。文字の他に、日時計や測雨器などの発明もした優秀な王で、国民に最も尊敬を集めている王である。第8代目の睿宗は、病弱で19歳で亡くなったようだが、父親の第7代目の世祖（在位1455年～1468年）は、仏教思想や寺院に関心が強く、大蔵経を刊行させた王である。『李王朝実録』に記された琉球王朝との交流の回数も、世宗大王の時が48回で、世祖王の治世には70回に上った。この数字は、第8代目の睿宗の死後、12歳で王に即位した成宗（在位1469年～1494年）の時の琉球王朝に関する最も多い記録の86回に続いて2番目に多い回数である。従って、第一尚氏6代目尚泰久王（在位1454年～1460年）が命じ、1458年に万国津梁の鐘が鑄造された頃という時期は、李王朝と琉球王朝の交流が最も盛んに行われていた時期で、文物の往来ばかりではなく、職人

を含めた人の交流もあっても不思議ではないと考えられる。

2.3. 首里城内円鑑池祠の経典とその行方

第一尚氏の6代目尚泰久王（在位1454年～1460年）の3男で、第一尚氏王統の最後の王様であった第7代目尚徳王（在位1461年～1469年）の在位の1467年に朝鮮国王にオウムや孔雀等の南方産の珍品が贈られ、その返礼として、琉球王国に経典（大蔵経もしくは、方冊蔵経）が贈られたという内容が『李王朝実録』に記録されている。

琉球王朝の第一尚氏王統は、20代の若さで亡くなった第7代目尚徳王（在位1461年～1469年）を最後に、64年間の歴史が終わる。それから、金丸という伊是名島出身で尚泰久王に仕えていた人物が尚円（在位1470年～1476年）を名乗って、第二尚氏王統の初代王となる。尚円王の死後、尚円王の弟が第2代目の王に即位するが、権力闘争で王位を退き亡くなってしまう。結局、尚円王の長男が琉球王朝の第二尚氏王統第3代目の尚真王（在位1477年～1526年）となる。尚真王は、歴代の琉球王様の中で最も長い50年間在位した王様で、その在位中に、首里城周辺の整備、仏教の奨励、内政の強化、貿易の発展など、多くの功績を残し、琉球王国の黄金期をもたらした。また、1502年、首里城の円覚寺前に円鑑池を作り、経堂を建て、李王朝からの経典を大切に保管したと言う。

当時の李王朝は、琉球王朝との交流記録が最も多かった第9代目の成宗（在位1469年～1494年）以降、権力闘争が続き、14代目の宣祖王（在位1567年～1608年）在位の1592年（壬辰倭乱）と1597年（丁酉再乱）には、日本の豊臣秀吉の侵略に遭い甚大な被害を受けた。一方、琉球王朝に対し、豊臣秀吉は薩摩藩の島津氏を通して、兵士の食糧などの供出を命じたが、財政難もさることながら、それまでの韓半島との交流を考え、要請に従うことが出来なかったと言われている。そのことが引き金になって、琉球王国は1609年に薩摩藩の侵略を受け、第二尚氏7代目の尚寧王（在位1589年～1620年）は江戸に連行され、事実上、薩摩藩島津氏の管理下に置かれる。薩摩藩の侵攻の際に、尚真王が大切に保管していた李王朝からの経典が紛失し、経堂も焼失した。現在の建物は1968年に復元されたもので、河川の女神と言われる弁財天を祀ってあるので、弁財天堂と呼ばれている。普通、観光客に首里城公園を案内する際は、首里城の正門の守礼門から歓会門を通して正殿を見せて終わることが多いが、歓会門の左下にある円鑑池まで足を伸ばし、天女橋が架かっている小堂まで案内し、琉球王朝と李王朝の友好的な交流史を伝えてほしいと思う。

2.4. やちむんと韓半島からの陶工

1609年の薩摩藩の琉球王国侵攻を受け、琉球王朝は薩摩藩の島津氏の支配下に置かれ次第に衰退していた。李王朝も1592年（壬辰倭乱）と1597年（丁酉再乱）、2度に渡り日本の豊臣秀吉の侵略を受け、国全体が甚大な被害を受けていた。当時は日本でも焼き物が非常に重宝され、特に、高麗の青磁や朝鮮の白磁など韓半島には陶磁器の技術が高度に発達していた。そのため、多くの陶工が日本に連行された。1616年、琉球王国の要請により、韓半島から薩摩藩に連行された陶工のうち、三人が琉球王国に渡った。

琉球王国には、1350年に始まった山田焼があったが、薩摩藩を通して韓半島から琉球王国に連れて来られた三人の陶工は、湧田窯で朝鮮式の陶法の指導に当たったという。今の壺屋焼には大きく2つの種類があり、1つ目は喜納焼と知花焼からの荒焼（アラヤチ）で、2つ目は湧田焼からの上焼（ジョーヤチ）である。17世紀に朝鮮の陶工から伝授された湧田焼は現在も沖縄の地に脈々と受け継がれている。特に、三人の陶工のうちの一人、張献功（チャン・ホンゴン）は、琉球で結婚し、湧田村（現在的那覇市泉崎）に家屋敷を下賜された。名前も仲地麗伸と称して朝鮮の陶法を伝え続け、1638年7月12日に琉球で亡くなったという。彼の墓は、那覇市牧志1丁目にあり、近くには中国出身の陶工である渡嘉敷三良の墓もある。

沖縄の民謡には、「瓦屋節」という歌があるが、異邦人である陶工の妻になった女性の心情が吐露されている。那覇市牧志にある「瓦屋節歌碑」によると、琉球の陶業発展のために来琉した瓦陶匠の妻は、夫のある人妻であった。王命により、異人の妻になった女は、瓦焼丘に登り、夫の住む村の方向を眺めては悲しみに暮れたという。この陶工が、朝鮮からの張献功であるのか、中国の唐からの陶工で琉球に帰化した渡嘉敷三良のことであるのか、議論されているが、今のところ 1579 年以前に琉球に来たという渡嘉敷三良が有力である。

薩摩藩を通して琉球王国に連れて来られた 3 人の陶工達の出身地について言うと、韓半島の全羅南道南原から 18 姓 43 人の陶工が薩摩の島津義弘軍に連れて行かれたという記録があるので、仲地麗伸(張献功)の出身地も韓国の全羅南道南原であろう。歴史の流れと共に、彼の子孫も沖縄の各地に存在しているはずである。沖縄県恩納村の恩納村誌に記されている「高麗神」の説明では、壺屋の陶工が山原を往来する際は、恩納村の仲泊に数泊していたという。当時、お世話をしていた島袋さんの家には仲地麗伸(張献功)の拝所があり、現在も清明祭には恩納村博物館の近くにある仲泊遺跡第 2 貝塚から約 2m 離れた所にある「高麗人墓」を訪れるそうだ。仲地麗伸(張献功)が琉球に定住した 17 世紀から現在の 21 世紀に至る長い時間を経て、分家や結婚などに伴い、苗字が変わった子孫も多くいると推測する。張献功は、意に反して韓半島から琉球に連れて来られたが、彼の子孫は、琉球の焼き物の発展のために力を尽くした自分たちの先祖に対して、大きな誇りを感じているに違いない。

2.5. やちむんと韓半島からの陶工

沖縄は、第 2 次世界大戦の際、日本国内で唯一地上戦があった場所である。1941 年 12 月、日本軍によるアメリカハワイ州の真珠湾攻撃を機に、日本とアメリカとの太平洋戦争が開始された。1944 年 12 月には、日本軍の第 32 司令部を沖縄の琉球王朝の正殿である首里城の地下に地下壕を構築し、その長さは 1 キロにも及んだ。多くの沖縄の県民が、この戦争により犠牲になったのは言うまでもない。米軍に対する戦力を補強するために、沖縄に配置された日本軍第 32 軍の他に、沖縄県民の 17 歳から 45 歳までの男子が防衛隊として招集され、また中学生以上の男女生徒は学徒隊として動員された。女子学生は、従軍看護婦隊として戦場に駆り出され、激しい戦闘で多くの若い命が犠牲になった。沖縄本島南部糸満市にある「ひめゆりの塔」は、旧陸軍第 3 外科壕跡に建てられたもので、当時、従軍看護生徒隊として看護に従事していた沖縄師範学校の学生と教員が命を落とした場所である。当時の約 59 万名の沖縄県民の内、この戦争で亡くなった一般住民戦没者は 94,000 人にのぼり、日本軍戦没者の 94,136 人に近い数の沖縄県民が犠牲になった。米軍戦没者の 12,520 人と他県からの兵士や沖縄県の軍人・軍属を合わせると、この戦争により沖縄で命を落とした人々は、約 200,656 人になるという。

韓国では、韓国が日本により併合された 1910 年から日本から解放された終戦日(韓国では、8 月 15 日を「光復節」という)の年である 1945 年までの 36 年間で、「日帝強占期」と呼んでいる。この時期に、沖縄県に軍の滑走路や防空壕などの労働力を補うための軍夫として、強制徴用されて連れて来られた韓国人の内、約 10,000 名の人々が、沖縄戦で犠牲になったと言われている。1975 年、沖縄県韓人居留民団や在沖韓国領事館が中心となって、韓国人慰霊の塔が沖縄戦の最後の激戦地だった糸満市摩文仁に建立された。場所は、平和祈念公園の中にある平和祈念堂から奥へ少し入ったところにある。その形は、韓国特有の丸みを帯びた形になっている。朝鮮半島の各地から連行され、遠い沖縄の地で戦没した御霊を癒すため、韓国の各地(8 道:当時の韓国の行政区域)から集められた花崗岩や土が使用され、韓国伝統の墓の形で造られた。入口には、韓国の著名な詩人であるイウンサン(李殷相:1903 年~1982 年)が書いた献詩が刻まれ、戦没者の御霊を代弁するような祖国を想う哀切な内容となっている。

3. 交流史の研究と今後の課題

韓国と沖縄との交流は、本稿の1. 1の「浦添市ようどれと首里城で見つかった高麗の瓦」で述べたように、琉球王朝の誕生前から始まっていたのが分かる。有史の記録としては、高麗王朝の末期である1389年からになっている。特に、李王朝（1392年～1910年）との交流は、1392年～1500年までの108年間で、最も交流が活発であった。1592年と1597年の豊臣秀吉による朝鮮出兵、1609年の薩摩侵略に伴う琉球王朝の衰退により、両地域の交流も殆ど途絶え、1832年には完全に途切れてしまう。しかし、琉球側の記録では、朝鮮人漂着記録が1868年まで続いている。

1471年（朝鮮王朝9代目の成宗2年）、申叔舟（シン・スクチュ：1417年～1475年）により刊行された『海東諸国記』は、当時の日本と琉球の歴史、地理、風習が記されている大変貴重な文献である。特に、琉球に関しては、1501年に「琉球国」が追加され、その中の「語音翻訳」という部分には、169個の琉球語がハングルで紹介されていて、琉球語の最古の資料として大変重宝されている。申叔舟は、李王朝の4代目の世宗（在位1418年～1450年）21年の1439年、官吏登用となり、5代目の文宗（在位1450年～1452年）と6代目の端宗（在位1452年～1455年）の時を経て、7代目の世祖（在位1455～1468年）の時は、朝鮮王朝の最高官職である領議政に就いた。彼はさらに、8代目の睿宗（在位1468年～1469年）や9代目の成宗（在位1469年～1494年）にも仕え、6代の王に仕えた政治家の中の政治家である。4代目世宗の時は、当時の学問研究所であった集賢殿に出仕し、韓国の文字「ハングル」の創製にも関わった人物である。また、日本語や中国語にも長けており、外交官としても活躍したという。

『海東諸国記』が刊行された後に、「琉球国」が追加され、当時の中世琉球語がハングルに置き換え、記録されたことから、この時期に両方の人的交流がかなり多かったと考えられる。『海東諸国記』を編纂した申叔舟が最初に仕えた4代目世宗（在位1418年～1450年）11年に、朝鮮に漂流してきた琉球人15名を琉球に送還したという記録がある。その際、世宗は琉球を対等な一国として待遇したそうである。申叔舟は、その後の5人の王にも仕えたが、特に、7代目の世祖（在位1455年～1468年）の時は、琉球との交流が70回もあり、第9代目の成宗（在位1469年～1494年）の時は、最も多かった86回もの交流があった。つまり、申叔舟が仕えていた6名の王の時代が朝鮮王朝と琉球王朝の交流において、黄金時代だったと言える。申叔舟自身もかなりの琉球人と接点があったと考えられる。しかし、琉球のことが追加されたのは、『海東諸国記』が刊行されてから30年も後のことで、申叔舟が亡くなってからである。彼が亡くなってからも、琉球の言葉や地図の情報を付け加えることができたのは、その後も、琉球との関係が友好的に続いていた証であると考えられる。

筆者が2001年に、沖縄県国際交流人材育成財団の奨学金を得て、国外派遣研究員として、ハワイ大学で韓国語教授法に関する研究のリサーチをしていた時に、韓国学科の複数の教授から沖縄についてよく聞かれた質問がある。洪吉童（ホン・ギルトン）のことである。洪吉童（ホン・ギルトン）は、許筠（ホ・ギョン：1569～1618）が初めてハングルで書いた小説『洪吉童伝』の主人公の名前である。この小説は、何回も映画化される程の人気の小説で、小説の時代は4代目の世宗の時代で、庶出として生まれた主人公の身分的、社会的差別による苦悩から反社会的な義賊になり、腐敗した豊かな官吏の財産を盗んで貧しい庶民に分け与えるなど、遁甲術を使って国の包囲網から逃げ、最後は、国を離れて理想郷である栗島国（ユルトグック）へ行って暮らすという話である。この栗島国が沖縄の島ではないかという説がある。特に、年代的に近い、石垣島のホンカワラ（洪家王）、すなわち、オヤケアカハチホンカワラという名前が若干の誤解を生んでいるかも知れない。しかし、小説『洪吉童伝』の作者である許筠は、1614年と1615年に中国の明に派遣されたことがあり、また、腹違いの兄は、日本通信使として日本を訪ねたという。許筠は、兄か

らも、また、明に派遣されていた時、日本や琉球の情報を手に入れていたかも知れない。

当時より 200 年も前に、朝鮮半島から琉球を正式に訪れた人がいる。3 代目太宗（在位 1400 年～1418 年）16 年の 1416 年に通信官として派遣されたのが対日外交官の李芸（1373 年～1445 年）であった。朝鮮の遭難者の送還を命じられ、派遣されたという。当時はまだ、三山が統一される前の時である。この時期は丁度、尚巴志が三山を統一する為に南山や北山を攻めていた頃で、特に、追い込まれた南山の王が朝鮮半島へ亡命したとの説があるが、明確なことは分からないままである。一国の王が他国に亡命を図った場合、14 世紀の事とはいえ、何らかの資料があるはずである。不運な出来事ではあるが、次のリサーチの課題の一つにしたいと考えている。

両国の交流は、中山王の察度が初めて高麗末に漂流民を送還したことから、好意的な交流が始まり、李王朝になってからも非常に友好的な交流が続いた。このような記録は、『李王朝実録』の研究を通して、より当時の情勢などが解明されるであろう。さらに、琉球と韓国はともに中国の冊封国であったし、また、日本に併合された共通の歴史を持っている。しかし、この分野の研究は、まだ充分になされているとは限らない。昨今は、大学間交流を通して、各分野におけるシンポジウム等が開催され、相互の研究成果を確かめ合う場になっている。このような成果をもっと多くの沖縄県民や韓国の人々に知ってもらえる工夫も今後の課題であると思う。まず、沖縄に興味を持って訪ねて来る韓国からの観光客に観光地を案内する際、通訳案内士が歴史的な関わりなども付け加えて説明できるようにする必要があるだろう。このような歴史的な事実を知ることで、韓国からの観光客は沖縄に対して、より深い繋がりや親しみを感じ、ただ一過性の観光ではなく、リピーター的な観光の形態になる可能性が高い。お互いの事を知ることで、沖縄と韓半島との歴史の交流が再認識でき、その分野の研究者が増えることを望みたい。

4. おわりに

韓国のソウル出身の筆者が沖縄に移住して、もう 30 年を越えている。韓国で過ごした年数を遥かに超えてしまった。当時は、韓国からの留学生も数えるくらい少なく、留学生のための大学の受け入れ態勢も不十分で、色々な面において苦労が多かった。また、沖縄から韓国までの直行便もなく、本土を経由して行くコースしかなかった。しかし、近年は、沖縄が韓国から最も近い避暑地として知られ、沖縄から韓国までの直行便も増え、毎日運航しているようになった。LCC（格安航空便）の参入もあり、経済的な負担も少なく、約 2 時間で沖縄から韓国へ行けるようになり、非常に便利になった。

本稿は、年々増えている沖縄を訪ねる韓国人観光客に、そして、沖縄県民に、両地域の先祖たちの交流により築かれてきた友好的な交流史や歴史的な足跡について伝えたいと思った。特に、沖縄と韓国は、先祖を非常に大切にするという共通な精神文化を持っているので、遠い昔、両方の先祖が行ってきた交流のことを知ると、沖縄をただの観光地ではなく、所縁の地として、より親しみを感じると思う。少しでも多くの韓国人観光客、また、沖縄県民に、両地域の先祖たちの歴史的な交流のことを知ってもらい、お互いのことを身近に認識し、将来、より友好的な未来関係を築けていけたら、幸いである。

参考・引用文献

〈日本語文献〉

新城俊昭（1999）『琉球・沖縄史』東洋企画。

石原昌家（2002）『争点 沖縄戦の記憶』社会評論社。

上原静（2000）「沖縄緒島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」アジア史学会第 9 回研究大会実行委員会編『アジアの中の沖縄』アジア史学会第 9 回研究大会実行委員会：137-148。

大田昌秀 (2007) 『沖縄の慰霊の塔』 那覇出版社.
恩納村役場(1980) 「第 12 章 村落誌」 『恩納村誌』 : 515-664
梶村秀樹 (2000) 『朝鮮史』 講談社現代新書.
倉成多郎 (2014) 『壺屋焼入門』 ボーダーインク.
嶋村初吉 (2010) 『玄界灘を越えた朝鮮外国官 李芸』 明石書店.
高良倉吉 (1993) 『沖縄歴史物語』 ひるぎ社.
田中健夫 (2000) 『海東諸国記』 岩波書店.
鄭仁秀 (2011) 『モンゴルの島—耽羅三別抄談』 東京図書出版.
朴永圭 (1997) 『朝鮮王朝実録』 新潮社.

〈韓国語文献〉

김경훈 (2006) 『뜻밖의 한국사 (知られてない韓国史)』 오늘의책 (オヌレチェク) .
남경태 (1995) 『상식밖의 한국사 (意外な韓国史)』 도서출판 새길 (図書出版 セギル) .
박영규 (1996) 『조선왕조실록 (朝鮮王朝実録)』 들녘 (トゥルリョク) .
송명호 (1994) 『이야기 한국사 (語る韓国史)』 바른사 (パルンサ) .
하우봉, 손승철, 이훈, 민덕기, 정성일 (2000) 『朝鮮과(と) 琉球』 도서출판 아르케 (図書出版 アルケ) .

〈その他の資料〉

沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課ホームページ (最終アクセス : 2015 年 5 月 9 日)
「浦添ようどれから高麗瓦大量出土」 琉球新報 (1997 年 3 月 27 日)
류큐왕국의 보물 (琉球王国의 宝) (2014 年 12 月) 문화재청 국립고궁박물관 (文化財庁 国立故宫博物館)